

特集：患者への図書サービス

院内図書サービス

—「オアシス文庫」「エンジェル文庫」の試み—

嶋 大二郎

1. はじめに

患者用図書館という考え方はかなり古くからあり、病院図書館の発生と発展に寄与したものとすれば、宗教・戦争（第一次、第二次世界大戦）・精神医学の進歩の3つの要素があげられる。勢い（特に前二者では）宗教的・道徳的な内容のものが主流であったが、娯楽をも含む一般的な蔵書も加えられるようになったのは18、9世紀の欧米においてと考えられる。日本では1950年頃から一部の病院で院内図書サービスが始まったが、すみやかな定着はむずかしく、1970年代に入ってからにわかに図書館界や社会一般の関心を集めるようになってきた⁽¹⁾。しかしその実数は現在も少なく、サービスが動いているとするものでも、それは病院側の自発的行為というよりもむしろ患者自身または外部ボランティアの活動に負うところが多いと思われる。事実、当院の院内図書サービスを準備するにあたって予備的に行ったアンケートでも、富山県の20余りの大病院で積極的なサービスを行っているところはなく、市立図書館による巡回サービスを利用しているものが一カ所と退院する患者さんたちが寄贈していった図書がたまっただけのものが一カ所程度とお寒い状況であった。

入院生活を余儀なくされた場合、その原因となった病気を治すべく医療を受けることが入院の最大目的であることは疑いがない。しかし単に疾患を癒すだけが病院としての務めではないはずである。QOL（Quality of life）が叫ばれる現在、

必要な処置を受ける以外の時間まで患者さんを一日中ベッド上に縛りつけておくという生活を強いてはなるまい。また、終日ベッド上絶対安静が条件の患者さんがそう多いわけではない。よほどの重症でないかぎり、患者さんたちにも日常に近い知的生活を送る欲求と権利があるはずである。しかしながら、病院側がこれに対して何も働きかけなければ、患者さんはしかたなく一日テレビジョンの画面を眺めて時間をつぶす結果になってしまいがちである。院内の売店で新聞を買っても長時間はつぶせない。本音として「本を読みたい」と思っている人は多いが、かなりな大病院でないかぎり院内で手に入れることのできるものは週刊誌程度で、じっくり時間をかけて「読書」できる書籍は家族に持ってきてもらうほかはなく、これではその時の本人の要求に応えられない。日常と違い精神的不安を抱えての生活の中で、いつもとは異なった内容への要求も出てくるであろうことは想像に難くない。

「入院の苦痛を強いられた人こそ読書の機会に恵まれるべきではないか」という素朴な疑問から、職員自らの手で患者用図書館を作ろうというこの試みは、本来医学用図書の充実を目的に作られた当院図書委員会を中心に始められた。

2. 開設への経緯

もともとそれを想定した空間がないことと使いやすさを考慮して、サービスの開始にあたっては一般用と小児病棟用の二カ所に分けることにした。職員からの応募により、前者は「オアシス文庫」、

しま だいじろう：市立砺波総合病院図書委員長・小児科部長

後者は「エンジェル文庫」と命名した。「オアシス文庫」は栄養指導室の一部の壁面のみを借りてのスタートとなった。

当初の最大の不安は蔵書を集めることにあった。多額の予算を使えば解決できるかもしれないが、それにしても短期間で利用に耐えうる量の収集はむずかしいと考えられた。しかしながら、現代の家庭は「蔵書の山」であることに着目した。本が「宝物」であった時代は過去となり、現在はほとんど消費材として扱われ、買って一度読んだ書籍はそのまま家庭内に眠っていることが多い。そこで当院では、職員から家に眠っている書籍を寄贈してもらうことを基本的な収集方法とした。また、サービスに供するにあたってのその他の基本的な方針を次のように設定した。

- (1) 蔵書は利用しやすいように約10種に当院独自の分類を行いラベルで色分けをする。
- (2) 上記分類とラベルの貼付の作業は図書委員が行う。
- (3) 蔵書を清潔に保つ目的で表紙にビニールカバーを張る作業は、手がかかるので全職員が分担する。(これは院内職員の全てがこの事業に参加できるという意義も持つ)
- (4) カード記入など貸し出しについては簡単な事務的手続きをとるが、これは単に「たくさんの方が順に使うものなので返却してください」という意思の表明であり、これをもとに返却を督促などはしない。

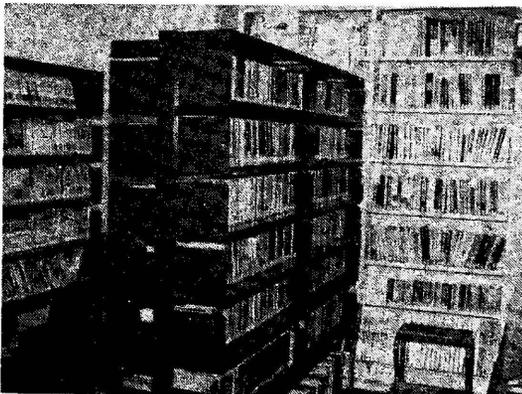


写真1. オアシス文庫

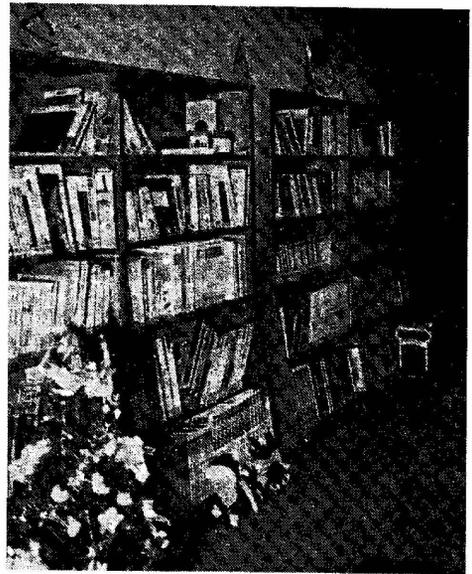


写真2. エンジェル文庫

- (5) 開館は人的な都合から当面毎週月・水・金曜日の午後3時30分から4時30分までの1時間ずつとする。

「寄贈による」という蔵書の収集は予想をはるかに上回ってはかどった。1988年12月に作業を始め、翌1989年4月12日に両文庫を同時に開館したが、この時の蔵書は「オアシス文庫」が約2,000冊、「エンジェル文庫」が約200冊であった。

3. 現 状

開館から3年半余り経過した1992年12月現在の蔵書は「オアシス文庫」が3,915冊、「エンジェル文庫」が796冊である。この間、寄贈本だけでは内容が片寄りやすい、文庫本の比率が高くて高齢者にとっては読みづらい、新刊書は集まりにくいなどの問題もあることがわかり、現在は年間20万円の予算で寄贈だけでは集まりにくい書籍の購入にあてており、購入本の全蔵書に占める割合は現在約5.8%となっている。当サービスへの共感は大きく、退院患者さんやその家族をはじめとする院外の人々からも現金や書籍が寄せられた。また、1989年にはユネスコライブラリーよりエン

ジュエル文庫へ、児童書 100 冊の寄贈も受けた。

1992 年 11 月現在の利用者数は一回平均 10 名（6～17 名）であり、うち 1.8 人は職員である。

また分野別に見た蔵書と貸し出しの割合では、両者はほぼバランスがとれている。貸し出しの半分は小説・文学類であり、内容的には古典的な文学よりも近年の推理小説を中心とした人気作家の軽い作品が多く利用される傾向にある。漫画・コミック類の貸し出しも多くなっているが、これは利用者数よりもむしろ一度に借り出す冊数の多さによるものである（図）。

現在のオアシス文庫のようすを写真に（写真1）に示したが、2年前より専用の空間を確保できたものの狭いという現実は解決されておらず、車椅子の患者さんにとってはきわめて利用しにくい。また、蔵書は寄贈を中心に増え続けているにもかかわらず、収納スペースが限界に近づいているという厳しい現実がある。

エンジェル文庫は小児病棟の遊戯室に置いて、特別の貸出手続きはしていないため確かな利用状況はつかめないが、オアシス文庫以上によく利用されている（写真2）。

4. 現在の問題点

当院の院内図書サービス「オアシス文庫」は当初予想した以上の評価と利用を得ている。しかし、抱えている問題も少なくない。

まず、1週間のうち月・水・金曜日の3日間のみ、しかも午後3時半から1時間だけの開館であるため利用者に多大の不便をかけている。専属の職員を置くだけの余裕はなく、医局の秘書に兼務してもらっているためであり、最も速やかに解決しなければならない問題である。毎日、しかも最低でも半日の開館が最終的な目的であり、現在ボランティアの採用などを検討中である。

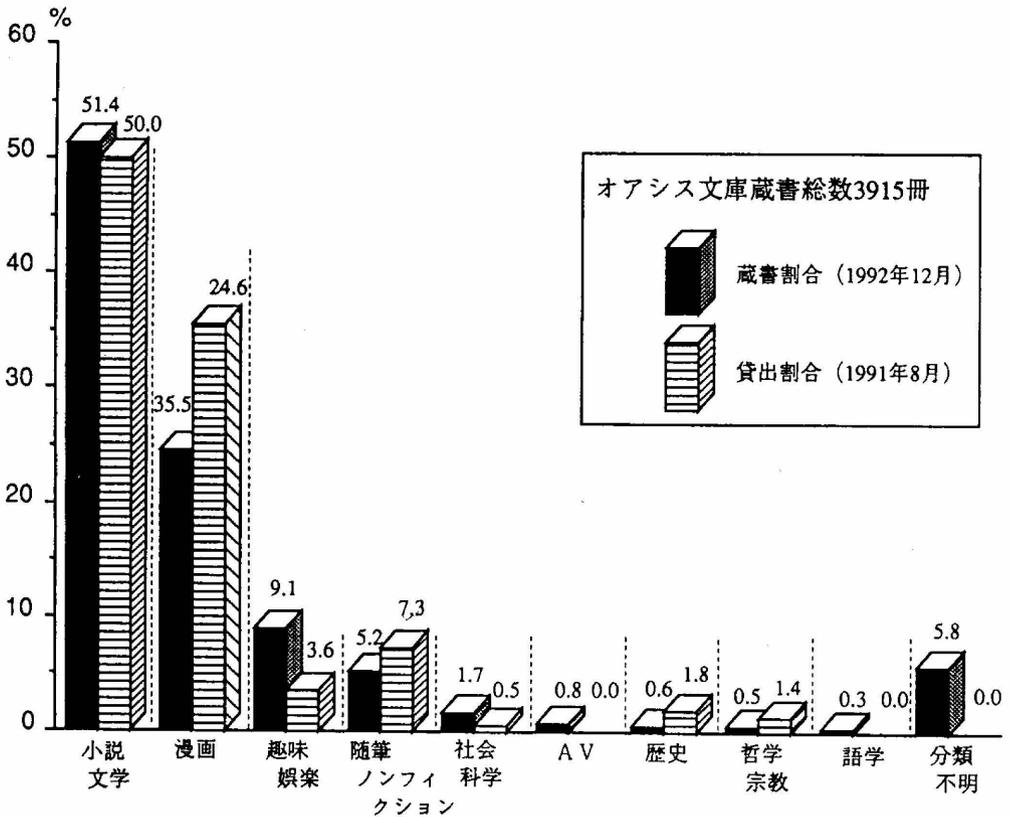


図 . 分野別に見た蔵書と貸出の割合（オアシス文庫）

また、もともと患者用図書館を想定しての空間はないので、途中から専用の部屋にはなったものの患者さんがゆっくり本を探したりあるいは閲覧したりするだけの余裕はまったくない。着実に増え続ける蔵書を収納するスペースもほぼ限界にきている。将来の病院の改築や増築の際に、患者さんたちがくつろげる空間として患者用図書館も含んだものを作っていく必要があると思われる。

利用者数については、開館毎に院内放送をすれば飛躍的に伸びることは経験上分かっているが、本来静かであることが要求される病棟内に定期的に放送することについては疑問も感じて現在は行っていない。利用を呼びかける他の方法も検討されなければならない。

蔵書の内容としては、需要があるのに寄贈では集まらないもの、たとえば、話題になっているあるいは人気のある新刊書や偏りの少ない宗教的哲学的内容のものを中心に購入で充実していかねばならない。

将来的には、高齢化に向けて大きな文字の書籍の充実、動けない人へのルームサービスなども考えており、それに備えて蔵書のコンピューターへ

の登録も進めている。

5. 最後に

当院の院内図書サービスの開始にあたっては、京都南病院司書である山室真知子氏から多大なお知恵を拝借したが、それでも短期間である程度の大きさのものを作るために独自の方法によらざるを得ず、試行錯誤の連続である。蔵書の収集・整理分類からサービスの実行の現場まで全てが模索である。院内図書サービスは少しずつ全国に定着しつつあるのかもしれないが、その実態を十分に把握したデータはないと思われる。現在この方面での活動を行っている病院の全国的な「輪」ができて、互いに抱えている問題点の解決法を交換しあえるようになることを望む次第である。

《 参 考 文 献 》

- (1) 菊池 佑・菅原 勲：患者と図書館、仙台、明窓社、1983年、P.9-59.

◆ お知らせ ◆

「医学中央雑誌刊行会」では所蔵資料の複写サービスを行っていますが、次の5種類の雑誌は著作権上の都合により複写できなくなつたようです。

これらはすべて(株)日本メディカルセンターの発行している雑誌のようです。

- *腎不全
- *臨床消化器科
- *腎と骨代謝
- *臨床透析
- *Chronic Disease